広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	村上春樹の文学について
Author(s)	ツラポウア ナルギーザ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1999 : 91 - 95
Issue Date	2000-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038925
Right	
Relation	

村上春樹の文学について

ツラポウア・ナルギーザ

村上春樹は現代日本文学の作家であります。しかし彼の文章スタイルはこれまでの作家のスタイルと大きく異なっている。村上春樹の小説と物語は約 20 年にわたって欧米や韓国の人々を魅了してきました。

村上春樹は 1949 年１月１２日に京都で生まれ、子供時代を工業の発達した港町神戸で過ごしました。彼は本が好きだったので、青年時代の多くの時間を本を読むことで過ごしました。その時代英語ができる日本人はあまりいませんでした。アメリカの船が神戸港へ入港するたびに船員が読み終えた本が二束三文で古本屋に売られました。

村上の両親は教師でした。二人とも国語の先生ということで、家では共通の話題として「枕草子」とか「源氏」が出てきました。小さい村上にとってはあまり面白くない状況でした。それで、村上は十代を通して 2 つのことを憎むようになりました。つまり、一つは教師、一つは日本文学です。

そして、Raymon Carver, Truman Capote などの作品をよく読んだ村上はお父さんとしばしば議論し、日本文学には非常に現代化が必要であるという思想が頭の中に強くなってきました。結局それらの議論が息子と父を引き離す原因となりました。

1966 年に早稲田大学に入って、自分も何か書きたいと思った村上はそこでパラドックスに突き当たりました。というのは、日本語で小説なり短編なりを書くと、それは日本文学になるからです。しかし、村上は日本文学を憎んでいましたので、結局、何も書けませんでした。それで大学時代は書くことをあきらめていました。

村上の大学時代は政治混乱に見舞われた時代でした。アメリカがベトナムで戦争を行った時代で、日本の若者はアメリカ軍の基地のフエンスに飛びかかっていました。1968 年の安保闘争の時は、大学生も自分たちの意見や主張を強く前面に押し出しました。しかし、大学生の反乱は失敗しました。そのため、失望した若者たちは、ひたすら個人内部の調和を目指すようになりました。

村上は「日本は参戦しなかったが、戦争をやめさせることが自分たちの義務であり夢であると感じられた」と思い出しています。

村上は早稲田大学でギリシアのクラシック劇を専攻して卒業し、結婚してから仕事を始めました。20 代の間ずっと働いて、29 歳のある日突然小説を書きたいと思った村上はその時のことをよく覚えています。1978 年 4 月東京で暖かい風の中に揚げたひらめの匂い

が空気に広がっていました。29 歳の村上はスタンドでニホン対アメリカの野球の試合を見ました。選手は上手にボール打ち返して、そしてもう一つそんなふうに打ち返しました。スタンドが荒れ狂いました。その時村上は小説を書くことができると思いました。彼がどうしてそう感じたのか今もはっきり言うことができません。“私はただそれがわかっただけです。”と村上は言っています。

1979 年から 1981 年まで村上と妻は東京に「**ピテル　ケト**」という小さなジャズバーを持っていた。毎晩閉店の後に村上は店に残ってテーブルで小説を書きました。その時最初に小説を、まず ABCDE という順

で普通どおりに書きました。ABCDE というのは既成小説の形で書く時の順番です。しかし村上春樹にとっては何もかもが面白くなかったのです。そこで、これをシャッフルすることにしました。例えば、BDCAE

いうふうに変えたのです。そうすると面白くなると思ったのですが、まだなんとなく重く感じられたので、例えば D とか A とかというふうに途中を抜いてしまいました。そうすると、何か不思議なモーメントという動きが出てきました。これで少し面白くなったんではないかと思って書いたのが村上の最初の「風の歌を聴け」という小説だったのです。その表題は村上の一番好きなトルメンカポテという作家の短篇小説から借用されたのです。「**群像**」という文学雑誌の賞はこれまで掲載されたことのなかった若者の作品のために設けられていました。「風の歌を聴け」を出して、村上春樹はそのコンクールで入賞するのを疑いませんでした。彼は間違っていませんでした。1979 年に出版されたこの短篇小説は、デビュー作としては前例のない 15 万部が発売されました。

しかし、村上は１９７９年から二作、三作と進めていこうと思うと、ストーリーがないとやっていけないことに気づくわけです。彼はこれだけでは足りないと思いました。だからこれを発展させた形で、少しずつストーリーを作っていき、それが「羊をめぐる冒険」という小説で一つの物語になります。フラグメンタリーではあるけれども、そこにははっきりとした一つの物語の流れができています。ただ、その物語というのは、これまで村上が日本の小説の中で、文学の中で読んだ物語とはずいぶん違っています。いわゆる近代、夏目漱石以降の小説の物語性とはずいぶん違っています。どこが違っているかは、村上にはわからないものでした。でもとにかく村上にとってはこれしかないと思うから、どんどんその物語を発展させていって今まで小説を書いてきました。

その物語がどういう意味を持っているのかは村上にはよくわかりませんでした。ただ、物語をひとつまたひとつと書いていくことによって自分が不思議に救われていく、自分が治療されていくというふうに強く感じています。それが、村上にとって、今まで小説というものを書き続けてきた意味でした。

現代の､同時代の日本の作家たちが提出する物語は村上の考える物語とは少し違います。その違いは何だろうと、村上自身も考えているわけです。

それまでの日本の文体では、村上が表現したいことが表現できなかったと思います。でも、村上は小説家としてやっていくためにはそれだけでは足りないということが、よくわかっていました。それで、そのデタッチメント（detachment)、アフォリズムという部分を、だんだん物語に書き換えていきました。その最初の作品が、「羊をめぐる冒険」という長編です。村上の場合は、作品がだんだん長くなってきました。その時村上は“長くしないと、物語というのはぼくにとって成立しえないのです”と述べています。

1991年までに村上春樹が書いた作品は、“羊をめぐる冒険”(1982)、“Norwegian Wood”(1987)、”Dance, Dance, Dance“（1988）の三作品です。1991年から村上春樹は外国へ出て、ギリシヤとかイタリアとかアメリカなどを転々とする間、作品を書いたり、F.Scott Fitzgerald, John Irving, Raymond Carver, Tim O'brien, Truman Capote, Paul Theroux などの作品を翻訳したりしていました。

村上春樹は小説を書き始めた時に、先行する小説家のスタイルの中に、真似したいというものがなかったのです。それで、まず何をしたかというと第一に、これまでのいわゆる作家のスタイルとはまったく逆のことをしてみようと思いました。村上はまず朝早く起きて、夜早く寝て、運動をして体力をつけました。文壇にかかわらず、注文を受けても小説は書かない。そういう細かいことを自分の中で決めて、そういうことを村上はやってきました。

そうしたら、けっこううまくいきました。ただ、それをずっとやっていると、村上はやはりこの社会の中で行き詰まると思いました。それが日本を出るまでの状況でした。村上は小説家になるというのは非常に個人的な行為だと思っていました。みんな自分の好きなものを書いて、それを持っていって売って、お金をもらって生活する。誰とも付き合わなくていい。ところが、そうではありませんでした。この世界もまた、日本の社会の縮図なんです。それを村上は小説家になるまで知りませんでした。だからそれが分かった時はすごくびっくりというか、不思議でした。

そういう日本的な土壌の中で小説を書くことが、村上は辛くなりました。そしていろいろ雑用とか、ややこしいことが多すぎたこともありますが、集中して仕事をするということがだんだん難しくなってきて、とにかく村上は外国に出て小説を書きたいと思って、この間までアメリカにいたわけですが、やはり全く違う土壌の中に２年、３年といると、考え方、ものの見方がだんだん少しずつ変わってきます。

村上が日本を出て最初に書いた長編小説は「ノルウエイの森」（１９８７年）です。その長編は空前のベストセラーとなりました。そして「ねじまき島クロニクル」は村上にとっては本当に転換点でした。

村上は「ねじまき島クロニクル」を書き上げた後、どうしてだか「そろそろ日本に帰らなくちゃなあ」と思いました。最後はほんとうに帰りたくなりました。そこで村上は「小説家としての自分のあるべき場所は日本なんだな」と思いました。というのは、日本語で

ものを書くというのは、結局、思考システムとしては日本語なんです。日本語自体は日本で生み出されたものだから、日本というものと分離不可能なんです。そしてどう転んでも、やはり村上は英語で、小説は、物語は書けない、それが実感としてひしひしと分かってきた、ということです。

村上が書いた作品のジャンルは読者にとってはいつも分かりにくいものです。何人かのアメリカの文学研究者は“Fantasy”あるいは非科学的なフィクッションの中に入れています。村上は最後の既成小説家**安部公房**に影響されたと考えています。しかし同時に”**羊をめぐる冒険**“を書くために少しばかりチャンデルから借りて、そしてフィツジライドに影響を与えられて、自分の一番大衆的な”ノルウエイの森“という小説を書きました。

“Norwegian Wood”はリアリズム的作品ですが、他の作品は殆ど全部作品の中に、読者の目の前に、モンスターの顔が見えます。そのモンスターは色々な形で現れます。あるストーリーでは半ば忘れられたホテルとして現れて、神秘的に客の運命を変えています。またあるストーリーでは動物の幻影が人々の心に住みついて、ストローでカクテルを飲むように、人々の心を食べて楽しんでいます。またあるストーリーではそのモンスターが英雄の反吐として現れています。そのモンスターについてはいいとか、悪いとか言うことができません。

イギリスの文学研究者 Susa J. Napierの考えによると、村上の確実な手柄とは男性文芸小説類の中に、はっきりとした女性の個人的な性格を表したことです。多くの場合、伝統的に、作中に登場する女性は、主人公である男性の特徴を描写するために一定の役割を果たしていました。ですから、村上作品の崇拝者の60%は女性です。

村上に対する評価はさまざまで、若者は崇拝するが、年よりはあまり好まない。しかし両者が認めているのは村上から非常に”バタ臭いにおい”がすることです。”バタ臭い”という表現は、日本人が食事の中に牛乳を使わない民族なので外から来たものを表しています。村上は彼らにとっては頭から足までバタ臭いのです。それは彼の英雄がステーキとか、ピザとかスパゲッテイを食べたり、エルフィツジェライルドやロッシーニの歌を聞いたり、”ノルウエイの森”という小説のタイトルがビートルズというグループの歌の題名から名付けられていることからも分かります。

一見したところではその物語はどこにでも起こるように見えるでしょう。作品の中には人々の名前とか苗字がなく、町とか道路の名称のついでに日本という国が存在しているのを想起させています。

村上春樹は現代第一の作家であり、若者に今の時代の英雄を提案しています。最近 20 年の間に日本社会は経済的・社会的問題を多く抱えるようになりました。そのため若者も自分を見失っています。それらを村上は作品の中に書いています。

現在村上の作品の読者や評論家は 2 つグループに分かれています。一つのグループは作品をよく読んでおり、もう一つのグループは村上の作品を理解できていません。年輩の

文学研究者は村上のことを”現実を見ない夢想家”と呼びました。

１９９６年までに村上春樹はアメリカのプリンストン大学で日本文学の講義をしました。子供のころに日本で暮らしたことのある、Alfred Birnbaum という人は、村上春樹の作品を数多く英語に翻訳しています。村上春樹の作品はアメリカの若者の中で人気があるそうです。

村上春樹の作品はこれからも世界の多くの人々に読みつがれていくことでしょう。

参考文献

21. 河合隼雄・村上春樹（1996）『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』
22. 河合隼雄対話集（1995）「現代物語り何か」『こころの声を聴く』
23. Kovalenin, D（1999）“Kosmopoliticheskie anarhii Haruki Murakami”（wwwsvl.-aizu.ac.jp）